

自転車シンポ、有効活用探る

専用レーン利用の課題も



自転車専用レーンの利用実態について意見交換するパネリスト（旧宇都銀行館で）

第5回自転車まちづくりシンポジウム in Ube「人に優しい交通づくり」は21日、旧宇都銀行館（ヒストリア宇都）で約60人が出席して開かれ、自転車が有効活用されるまちを目指して意見交換した。うべ交通まちづくり市民会議（うべこまち）主催。市地球温暖化対策ネットワーク（UNCCA）共催。

基調講演では古池弘隆宇都宮共立大教授が「自転車のまち・宇都宮と世界の動き」のテーマで話した。引き続きパネルデイスカッションでは、村上ひとみ山口大准教授が司会を務め、今年4月から運用している自転車レーン（神原交差点から清水川交差点までの市道神原町草江線の900m区間）を取り上げ、利用実態と課題、今後の可能性について話し合った。パネリストの久保田后

子市長は、人口減少と少子高齢化が進む中でネットワーク型コンパクトシティや低炭素型まちづくりが宇都の未来像とし、自転車については「地域の拠点同士を結ぶ多様な交通手段の一つとして重要」とした。村田雅子建築士は「都会ではカフェが併設された自転車店があり、自転車メンテナンスだけでなく仲間の交流拠点にもなっている。そうしたファッション性も自転車人口を増やす要因になる」と提案した。通学などで専用レーンと関わりのある山村季莉さん（宇都中央高1年）は「環境負荷を軽減したり、健康増進には自転車は有効。ただし専用レーンは狭く車との距離が近く怖い。むしろ歩道にレーンを設けてほしい」。池田梨瑛さん（慶進高2年）は「スマホ、傘差し運転などマナーにも問題があ

るが、ドライバーも赤信号で強引に突っ込むシーンも。追いつかれる際に恐怖を感じる。自分も専用レーンは利用しない」と話した。

古池教授は「自転車にバックミラーを付けるのが有効」とコメント。村

上准教授は「900m区間の専用レーンだが、長い方が使い勝手が良い」と指摘もある。利用率も上がってきており、歩行者、ドライバーも含めて繰り返し周知徹底するのが求められる」とまとめた。（浅野）